
馬に蹴られろっ！

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬に蹴られろっ！

【Nコード】

N9028W

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

兄ちゃんはね、気になって気になって仕方ありません。だって、君は僕の小さな妹なんだから————高校に入学したばかりの妹に、オトコができたらしい。俺が保育園まで迎えに行って、俺と寝るんだと駄々をこねてた妹だ。相手はどんな男だ。妹を泣かすようなことをしたら、俺が………過保護すぎる兄の、妹離れ顛末………か？

ストーキング兄

うららかな春の日差しの遊園地で、恋人と腕を組み歩く男。沢渡敦彦、二十七歳。

「ねえ、ジェットコースターは？」

「ああ、うん」

先刻から生返事の彼は、恋人と腕を絡ませながらも遊園地の中をひたすら歩くのみである。

「あっちゃん、何か探してるの？せっかく遊園地に来たのに」

「ん、いや、たまには童心に返って」

「じゃ、コーヒークップくらい」

「いや、ちょっと待って……見つけたっ！」

「何を？」

返事ができないくらい夢中になっている視線の先には、高校生らしきカップルがある。

「ねえ？あっちゃん？」

恋人はゆっくりと敦彦を見上げる。

「遊園地に行こうなんて行ったのは、あたし以外の女の子の後をつけるって理由だったのかしら？だとしたら、私はいい面の皮ってところ？」

「いや、もちろん真澄と遊びたかったんだとも！」

「じゃあ、さっきからアトラクションに見向きもしないで、探していたのがあの子じゃなかったとでも？この浮気者のロリコン！」

恋人は乱暴に腕を離し、ついでに敦彦に背を向けようとした。

「違うっ！待ってくれっ！浮気でもロリコンでもないっ！あの娘は……」

「あの娘は？」

前方の二人が振り向き、女の子がしげしげと揉める二人を眺めた。
そして――

「あーっ！ あっくんっ！ 何でここにいるの？」

「……妹、なんだ」

何かを言いたそうにしている恋人に必死の目配せをして、敦彦は妹に向かって手を振ってみせた。

「奈津も来てたのか。偶然だなあ……お、デートか？」

いささか棒読みの台詞に、隣に立つ恋人の、まじまじとした視線が痛かった。

不審そうな妹と、不得要領の顔をした男の子、そして片眉を上げたままの恋人を連れてフードスタンドに並ぶ敦彦は、出来得る限り兄の威厳――あるとすれば、だ――を保とうと、頭の中で会話を組み立てる。まず、奈津と一緒にいる男の情報を引き出し、ヤツの子供振りを暴き、妹を見守る立場の兄がいることを、焼き付けてやるのだ。思春期の男の頭の中など、ろくでもないに決まっているではないか。
「奈津はソフトクリームだよな？ そっちの君は？」

「あ、自分で買いますから」

生意気に、遠慮してやがる。

「いいんだよ、妹の友達なんだから。子供は、大人に甘えとくものだよ」

「では、お言葉に甘えさせていただいて。コーラとフレンチフライを」

奢られるのに、二品頼むのか！ ずうずうしい奴だ。

「あっちゃん、私はコーヒーフロートね」

恋人の真澄が横から口を挟み、席の確保をしようと他の二人を連れて行った。

「えーと、ソフトクリームとコーラとフレンチフライと……なんだっけ？ コーヒー！ コーヒー二つください！」

「あの綺麗なお姉ちゃん、コーヒーフロートって言ってたよ、お客さん」

カウンターのオジサンが、敦彦に向かって言う。

「へ？コーヒーフロート？じゃ、それ二つ」

出てきた品物を見て、敦彦は溜息を吐いた。アイスコーヒーにアイスクリームが浮かんでいる。

俺、コーヒーの甘いのって駄目なんだよな。何でこんなもの、頼んだんだろう？

トレイを持って妹の座る席に向かう。妹は男と親しげな微笑を交わし、時々敦彦の恋人の話に相槌を打っている。テーブルの上に持っていたトレイを乗せ、座に加わった敦彦は、苦い顔でストローを咥えた。

妹は成長している

妹のデートを耳にしたのは、一昨日である。高校生になったばかりの妹の服装にケチをつけたら、こういうのがシュミな人だっていうのだ、と返された。

「彼氏でも出来たのか？」

「ふっふーん。日曜日には、ゆーえんちっ！」

音符のつきそうな返事があり、鼻歌交じりに妹は部屋に引っ込んだ。へええ、そんな年頃なのかと思うと同時に、相手の男が気になった。十二歳年下の妹は、高校生になったばかりだが、敦彦から見れば立派に子供だ。中学・高校と部活帰りに保育園に迎えに行き、自分の部屋の中で一緒に寝たがった小さな頃と、大して変わらないように見える。

敦彦がはじめて彼女らしき存在を持ったのは、中学生の頃なのだから、奈津は別段早いほうじゃない。兄の欲目で言うのもなんだが、十人並み程度には可愛いし、活発だ。

活発——そっちにまで、積極的じゃなくていいぞ、奈津。

そっちってのがどっち方面だか、敦彦は考えたくない。自分自身は高二的夏に女子大生と済ませた、アレである。

自分の妹が、その対象になるのは……ダメだダメだっ！あんなに小さくて、俺と一緒にじゃなきゃ寝ないって駄々こねてたヤツだぞ。

自分はやっぱり、恋人と散々そういうことをしているのにも拘わらず、である。

朝っぱらからウキウキと鼻歌を歌いながら、紅茶に大量にミルクを入れている妹を横目に見ながら、真澄に目的場所変更のメールを入れた。

見てやる。奈津に男の見定めなんて、出来るはずがない。

高校生がゆつくりと出発する遊園地は、行動範囲内でふたつ。初デートなら手堅いところで、敷地が広くて繁華街には近いあっち側だとアタリをつけて、敦彦も出掛ける支度をはじめ。真澄が了承のメールが入ったのを確認して、行動開始だ。

「あっちゃんが遊園地なんて、言い出すとは思わなかった」

普段よりもアクティブなスタイルで現れた真澄を促し、入園チケットを買う。

「あたし、遊園地よりもそっちの温泉の方がいいなあ」
遊園地の隣に、温泉施設があるのだ。

「いや、ジェットコースターに乗りたくなって」

「らしくない。映画館に入って寝ちゃう人が」

妹のデートを覗きに来たと言ったら、真澄はどんな反応を示すだろう。俺は断じてシスコンではない。

だから、これはあくまでも偶然だ偶然。たまたまジェットコースターに乗りたくなったら、そこで奈津がデートしてるのだ。

ありきたりな妄想

「あつくんも、遊園地でデートするんだ？」

ソフトクリームのコーンを齧り終えた奈津が、巻いてあった紙を丸めながら言う。

「たまには外で遊ぼうと思うことだって、あるよ」

真澄の鼻の頭に、小馬鹿にしたような皺が寄るのを、見えないことにした。向かい側（忌々しいことに、奈津の隣である）に座る男の子は、ごくごく普通の顔でフレンチフライを口に運んでいる。

彼女の兄が同席してるんだから、ちょっと緊張した顔くらいしやがれ。可愛げのない。

完全な言いがかりだ。敦彦は紙のコップを傾けて、中の氷を口の中に入れ、ガリガリとそれを噛み砕く。同じ中学校出身で、同じ高校に入ってから仲良くなったのだと、先刻奈津に説明されたばかりの相手は、敦彦よりも五センチ程度背が低い。今風に髪をワックスで盛ってはいるが、丸い目が頓狂に子供っぽい。

「弘樹君、次は何に乗る？」

「んー……お化け屋敷にでも行こうか」

お化け屋敷Ⅱ暗闇Ⅱ手を握る気だろ。

「真澄、俺たちもお化け屋敷行く？」

「お化け屋敷い？今更そんなもの……」

「最近はつくりが凝ってるらしいから」

四人連れ立ってお化け屋敷まで歩く途中、敦彦は並び順が気になる。前に奈津とオトコが嬉しそうに並んでいる。割って入りたいような衝動に駆られ、隣の真澄に気がついて、いかんいかんと自制する。

妬いているわけじゃないんだぞ。兄貴としてだな、妹の監督義務が……

「はい、お二人ずつお入りくださいーい。次の組の出発は、二分後になりまーす」

二人ずつ？団体で一緒に入れないのか？

「奈津は俺と入るか？怖がりだろ？」

「あつくと遊びに来たんじゃないの！真澄さんと入ればいいじゃない！」

ごもつともな台詞である。敦彦の後ろで、真澄は思いっきり溜息を吐いていた。

「あっちゃん、来たくもないお化け屋敷に、妹の邪魔をしに来たわけ？」

「いや！真澄と二人で嬉しいとも！」

「リアリテイ、皆無。あたし、帰ろうかなあ」

帰られてしまったら、敦彦がここに来た理由がなくなるではないか。お化け屋敷を出たら妹と別行動することを約束させられ、スピーカーから流れてくる妹の悲鳴を聞く。

抱きついたりしてないだろうな。そして、抱きつかれたのを良いことに、あいつが……

自分にしか照らし合わせることができない悲しさで、敦彦の妄想はあらぬほうに寄る。遊園地のお化け屋敷で、コトに及ぶ不埒者は、いない。

お化け屋敷を出たら、当然のように奈津は待っていないかった。

「保護者つきでデートしたい子なんて、いないわよ。諦めなさい」
肩を落とした敦彦に腕を絡ませ、真澄が顔を覗き込む。

「いい子じゃないの、彼。礼儀正しくて、優しそうだったわよ」

いい子だろうが何だろうが、敦彦は知ったことじゃない。もしもあいつが奈津を傷つけるようなことがあれば、俺がただじゃ置かない。それをしっかり理解させておかなければ。

ガキのくせに

敦彦が帰宅した時には、既に奈津は帰宅して入浴中であった。当たり前である。面白くなさそうな真澄の機嫌を取るために、ラブホテルまで行ってフルコースこなしたのだから。

本当は早々に帰宅して、奈津の帰宅時間を見届けたかった。その後、遊園地の中で奈津の姿を見つけることはできず、言われるがままにアトラクションをいくつか回ったが、敦彦は元来、眠たがりの面倒臭がりだ。はしゃぎもしない遊園地が、楽しい筈なんかない。普段は真澄の「あーしたいこーしたい」に付き合って街を歩くが、自分からどこに行こうって提案なんか、まずしない。今日はやけにエネルギーを使った日だった……

「奈津、何時頃帰って来た？」

「八時頃だったかしら。今日の夕飯はお父さんと二人で、静かだったわよ」

のどやかな母親の返事に、ほっとする。少なくとも、平和な顔で帰って来たということだ。

「あんたもそろそろ、彼女連れてきなさいよ。奈津を送ってきた子、可愛かったわあ」

「来たの？」

「ううん、外の鉢植えのヨトウムシ退治したら、帰って来ただけ。きちんと挨拶のできる子でね」

送ってきたのは、プラス点にしてやろう。それにしても、夜道を二人で……

「あつくん、今頃帰り？ いいな、こんな時間まで遊んでも、怒られなくて」

奈津が髪を拭きながら、リビングに顔を出した。

「俺は男だから、いいのっ！」

「真澄さんも一緒だったんでしょ？真澄さん、女じゃない」

「だから、送ってきたっ！」

「あたしも送ってもらったもん。いちいち感嘆符つけないでくれる？」

「あー言えばこー言う。可愛くねー」

「あつくんに可愛いと思われたって、仕方ないもん。バカじゃん？」

奈津はクールな顔で、冷蔵庫から麦茶のポットを出す。クリップで挟んだ髪が、肩に一筋落ちていた。

ガキの癖に、ませやがって。

この時点で、自分のファーストキスが中学校の二年生だったことは、高い棚の上に乗っているのである。

「奈津、あいつ、部活とか入ってないの？日曜日に遊んでて」

「中学校の時はサッカー部だったんだけど、高校に入って一緒に軽音に入った。今、ベースの練習中」

けっ。ナンパが。口の中で吐き捨てて、風呂に向かう。遊びの手慣らしに、奈津みたいにオトコと付き合ったことがない女の子は、持って来いだもんな。

「あつくん、パンツいっちゃで、ウロウロしないでくれる？乙女が一緒に住んでるんだよ」

出しっ放しの麦茶のポットを冷蔵庫に収めたら、クッションを抱えてテレビを見ている奈津から、声がかかった。

「オトメだあ？自分が使ったコップも洗わないガキが、何言ってる」

「奈津は来月から、結婚だってできるもん。家の中でパンツいっちよの男なんて、真澄さんだって嫌がると思う」

奈津が置きっ放しにしているコップを回収して、シンクで洗いながら、敦彦は苦笑する。婚姻年齢に達することが大人だと思ってい

るあたりが、ガキの証拠だというのに。

帰宅途中

仕事帰りの敦彦が駅の階段を下りると、目の前に見たような制服姿のカップルが居た。もう八時過ぎだというのに、これからドーナツ屋に入ろうとしている。

「奈津っ！こんな時間に、なんでウロウロしてんだ」

「あれ？あつくん、おかえり。お母さんには、ご飯いらないって電話したから、これからご飯」

「ご飯って、ドーナツがか……」

隣にいるのは、ブレザーのクセにスラックスを腰で引っ掛けているバカ（と、敦彦は思う）である。

「弘樹君、だっけ？制服は規定通りに着たほうが、頭が良さそうに見えるよ」

慌てて制服を直す高校生を、敦彦は冷ややかな目で見下ろした。

「高校生の小遣いじゃ、ドーナツだろ？メシ、奢ってやろうか？」

「いいのっ！奈津がドーナツがいいって言ったのっ！」

「奈津ならそれで足りるかも知れないけど、彼氏は足りないと思うよ。ねえ、弘樹君？」

有無なんか、言わせるもんか。これ以上遅い時間に、暗い道を一人で帰されたら困る。かといって、送らせたらもっとアブナイじゃないか。

「そこにあるラーメン屋、結構旨いから。弘樹君、いいよな？」

雰囲気良くてリーズナブルなパスタの店を通り過ぎ、旨いが油臭いラーメン屋に入る。

「奈津、パスタの方が良かったなあ」

うるさい。奈津だけなら、もっと高級な場所に連れて行くんだ。

「ところで部活、こんな時間までやるの？」

他の学校と合同のコンサートがあるのだと説明を受けたところで、注文したものがテーブルに並んだ。

「何？ステージに立つわけ？」

「一年生なんて、出してもらえないよ」

奈津が答えたところで、弘樹が口を挟んだ。

「いや、なっちゃんはお出ろって言われてたじゃない。先輩たち、なっちゃんの取り合いしそうだし」

「取り合い？なんだ、それ。」

「なっちゃんはキーボード上手だし、人気があるんです。他のクラスの子も……」

「そんなこと、ない。それに奈津が好きなのは、弘樹君だもんっ！」
敦彦は思わず、むせた。

こいつら、兄が目の前に居るってわかっての会話か。

「お兄さん、聞いてくださいよ。なっちゃん、俺の目の前で先輩とメアド交換するんです」

「浮気とかじゃないもんっ！連絡先だもんっ！」

お兄さんだあ？じゃなくって、なんだこの会話。

「……痴話喧嘩なら、俺の居ないところでやってくれ」

「あっくんが一緒になって言ったんじゃない。頼んでないよ」
ごもつともである。

帰宅途中（2）

「さて、じゃ、帰るぞ」

「これから、本屋さんに行って帰る。あつくん、先に帰ってていいよ」

そんなことを許したら、夕食を食べさせた意味がなくなるではないか。

「今日は遅いから、明日にしろ」

「弘樹君が送ってくれるから、大丈夫。まだ九時前だよ」

「そんな時間まで、制服でウロウロするな。弘樹君だって、帰りが遅くなるだろ？」

「いや、大丈夫です。ウチは十一時までに帰れば……」
余計なこと言うな。

「だーめっ！女の子がこんな時間に出歩かないっ！」

「真澄さんと出歩いてるくせに」

「真澄はいいのっ！大人だからっ！」

あー言えばこー言う。やりにくいこと、この上ない。

「弘樹君も、もう帰りなさい」

兄にここまで言われて、強く出られる高校生はいない。ご馳走様でしたと頭を下げて、弘樹は別方向に歩き出した。

「あつくんのバカ！本屋に行こうねって約束してたのに！じゃないと弘樹君、隣の席の女の子に借りた本、読まなくちゃならないじゃない！」

「なんだ、それ？」

「中学生みたいだけど、ホームルーム前に、読書の時間があるの。」

弘樹君の隣の席の女の子、しょっちゅう弘樹君に本を貸してるの！意味が通じない。

「本くらい、借りたらいじゃないか」

「ダメなのっ！だって、可愛いんだもん！」

瞬間、吹き出しそうになった。

「隣に座ってるんじゃ、本借りるくらい阻止したって、手遅れだろ」

「ちよつとでも接触させたくないのっ！」

所詮、ガキはガキだ。見た目が可愛いってだけで、アイだコイだと騒ぐ。

妹と並んで歩きながら、敦彦は真澄からの電話を受けた。

「あ？今、帰り。奈津とメシ食ってきた」

『えー？最近、べったりじゃない？あっちゃんって、シスコンだった？』

「違うって。駅で会ったら、彼氏と一緒にだったから」

『そうしたら兄としては、遅くならないようにって訓示垂れて、小遣い渡すのが正しいんじゃない？』

そんな、泥棒に追い銭してやるような真似、できるもんか。

『なーんかあたしより、なっちゃんのが大事にされてるよねー』

「そんなこと、ないだろ」

『あたし、会社の男の子に飲みに誘われてんのよね』

「断れ！！！」

『ほらー。直接阻止じゃなくって、あたしの主体に任せようとするー』

「信用してるからだろ？頼むわ」

奈津も歩きながら、メールを打っている。

「奈津っ！歩くときは前見て歩け！事故に遭うからっ！」

思わず受話器に向かって叫び、気がつくとも真澄の通話は切れていた。

兄は面白くない

風呂に入ろうかと下着を抱えてドアを開けると、風呂場から音がした。仕方がないので、ドアを閉める直前、脱衣籠の中に奈津の下着が見えた。カワイイといえばカワイイが、清楚とは言えないポップな色遣いだ。真澄がつけているような、繊細なレースの下着とは程遠いが、これはこれで嬉しいかも……って、誰を嬉しいがらせるんだ。

深く考えるな。奈津はまだガキだ。

夏にタンクトップ一枚で歩いていた時、思いの外ボリュームのある胸に驚いたのは、内緒である。幼稚園児みたいに二つに結んだ髪と、その身体つきのギャップは、男の目を引くかも知れないと、若干の危惧はあった。そうか、ガキだからこそ見る目もないし、騙され易いとも言えるのだ。

居間で携帯電話を片時も離さずにメールに勤しんでいる奈津に、思わず親父臭い小言を言う。

「携帯、手に張り付いてんじゃねーか？他に何か、自分のタメになるようなことでもしろよ」

「敦彦の方が、よっぽど目に余ったわ。あんたはメールじゃなくて、帰ってこなかった」

母親から余計なちゃちゃを入れられ、面白くないことこの上ない。部活動のあとにゲームセンター、そしてファーストフードカラーメン屋、記憶にあるので反論できない。イマドキのガキって意味では、敦彦も大差ないことをしていたわけである。

「練習しなきゃ。結局、キーボードやることになっちゃってえ。ヒロ君、出ないのに」

携帯電話の液晶を見たまま、奈津が呟く。

「だから、ちょっと不機嫌なんだよね。奈津だけコンサートに出る

から」

「小せえヤツだな、止めとけば？」

「なんでよっ！ヒロ君、優しいんだからね！」

ふんつと鼻で笑う。その年頃の自分と照らし合わせて考えると、それは間違いだ。一番は自分の感情と欲求だったさ、その頃。

また携帯の着信音が鳴り、慌てて液晶を確認する奈津の顔が、一瞬ぱつと輝く。嬉々として返信してから、敦彦に向かって勝ち誇った顔をしてみせる。

「自分が出ないのに、明日練習が終わった頃、スタジオまで迎えに来てくれるってー」

「はいはい、お幸せに」

「あつくんも、真澄さんによろしくー」

真澄は、今頃合コンだ。しかも、あきらかに率先参加だ。最近敦彦の口から出るのは、奈津についてばかりだったから、おかんむりなのである。

だって、今一番の懸案事項はそれなんだから。

『仕事の愚痴なら聞かし、落ち込んで黙り込むのも結構！だけど、会うたびになっちゃうんの話ってどうよ？立派なシスコンよ！ヘンタイ！』

「いや、そんなつもりは全然まったく。奈津に欲情したことなんてないし」

『そういう問題じゃないっ！今一緒にいるのが誰なのか、わかってる？』

「えっと……真澄サン」

『じゃあ、あたしが何を求めてるか、知ってる？』

「えっと……ホテル、行く？」

『ばっかっ！』

このやりとりは先週のことと、やっとな機嫌をとったばかりだ。真

澄に奈津の話は、しばらく厳禁。そして嬉々としてメールに勤しむ奈津は、敦彦の顔なんて、当然お構いなしなのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9028w/>

馬に蹴られろっ！

2011年12月3日16時52分発行